



## 愛・地球博記念公園「あいちサトラボ」

株式会社オオバ 小林高浩・木村晃一・松岡史展・小柳太二

あいちサトラボ里山開拓団 加藤正人

愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科水津研究室 水津 功

愛知県尾張建設事務所都市施設整備課 山口知幸

公益財団法人愛知県都市整備協会 黒滝真克

2013年6月1日、愛・地球博記念公園に「あいちサトラボ：農のエリア」がオープンした。本作品は「県民協働による公園計画づくり」と「公園利用者と行政とのパートナーシップによる公園管理運営支援」のハード・ソフト両面における取り組みである。

### □ 県民協働で取り組む「県民公園づくり空間」

2005年日本国際博覧会の会場であった本公園は、博覧会閉幕後に再整備基本計画がまとめられ「県民と行政とのパートナーシップによる公園整備と管理運営」が掲げられた。その中で本エリアは「県民公園づくり空間～県民の参加・協働によりみんなで公園を育てるエリア～」に位置づけられた。これは利用に留まらずテーマ設定や整備・運営も県民意思を尊重する「公園づくりの実験場」というべきものであった。

### □ 公園計画と公園管理運営のプロセス

2007年度に愛知県がワークショップを呼びかけたが

博覧会の余韻が残る中、参加者からはパビリオンや国際交流施設などを求める様々な意見が寄せられ、色々な思いが乱立する状況であった。

当初は愛知県とコンサルタントとで事務局を務め、コミュニティデザインに精通するアドバイザーの助言を得ながら将来像の具現化に取り組んだ。ワークショップ参加者による準備会が活動を開始し、整備目処が立つ頃から公園管理受託者も本格的に加わり協働体制を築いていった。この長期のプロジェクトを着実に進められたのは県民参加を堅持してきた事業者（県の歴代の関係者）のゆるぎない姿勢によるところが大きい。

これまでの各段階でのポイントを次に示す。

- ①構想段階：初期は県民が主役となれるビジョンの確立に注力した。丸2年に及ぶ議論を経て漸く「自分たちの手でつくっていくプロセスを大切に、農の営み



稲刈り 多くの労力を要する田植えや稲刈りは参加者を募集して実施している。左奥の建物が拠点施設「ラボハウス」。その手前が畑、右斜面には果樹園が広がる



開拓開始 2010年に礫・粘土の劣悪地の土作りから開始。合言葉「火星を開墾」



開園祭 2013年6月1日の開園式には大村知事が来園され祝辞を頂いた

作品概要

作品名：愛・地球博記念公園「あいちサトラボ」  
 対象地：愛・地球博記念公園の県民公園づくり空間「あいちサトラボ」エリア  
 愛知県長久手市茨ヶ廻間乙1533-1他  
 発注：愛知県尾張建設事務所都市施設整備課  
 事業目的：県民の参加・協働による「あいちサトラボ」の推進（調査・計画・設計・建築施設工事監理・活動運営）  
 事業体制：株式会社オオバ  
 以下の団体との協働により調査・計画・設計・活動運営支援を7年間一貫してコーディネート（注：業務受託できなかった1年間は個人会員として参加）  
 協働者等：（活動団体）あいちサトラボ里山開拓団（会員65名）  
 （事業者）愛知県尾張建設事務所都市施設整備課（公園管理受託者）公益財団法人愛知県都市整備協会愛・地球博記念公園管理事務所  
 （総合アドバイザー）愛知県立芸術大学美術学部水津研究室 水津 功  
 （農業指導）特定非営利活動法人長久手公共施設協力会  
 事業期間：2007年9月～2009年6月※1、2009年8月～2011年3月、2012年4月～2014年3月 ※1：担当者が前所属会社（飯沼コンサルタント：廃業）で従事  
 事業規模：供用区域約1.7ha（計画面積約8.1ha）

作品評

この作品は、公園内での農体験という、都市における公園の新しい活用方法について、愛・地球博記念公園内の一角を舞台として実践しているモデルである。「県民協働による公園づくり」という計画づくりをサポートしつつ、「公園利用者と行政とのパートナーシップによる公園管理運営」という具体の活動についても支援している。計画づくりで6年、活動支援で5年という長きに亘る継続的なマネジメントと、それを支えた努力、ならびに多岐におよぶ業務内容を具体化した能力が評価された。  
 特に、様々なレベルでの市民意見を丹念に調整し、「現代の里山づくり」というコンセプトをまとめ上げ、実践している点に評価が集まった。

や先人の知恵を実体験することで自然の循環を学び伝える場」とする県民参加の基本方針がまとまった。

- ②設計・整備段階：活動準備会結成後の2年間は、準備会をサポートしつつ、基盤施設・建築施設の基本・実施設計をワークショップ方式で作りに上げた。設計は人力では困難な基盤造成やインフラに留め、過度なデザインは避けて「人の手で里を開拓し、試行錯誤しながら作っていきける」舞台を整えることに主眼を置いた。
- ③運営段階：基盤整備が進んだ後の直近3年間は拠点施設「ラボハウス」の施工監理と共に、発足した活動団体「あいちサトラボ里山開拓団」の事務局運営をサポートしている。オープン後は一般来園者へのガイドやプログラム提供も加わり、県民が主役の「現代の里山づくり」に協働で取り組んでいる。

□共感型コミュニティの形成をめざして  
 「あいちサトラボーAichi Satoyama Laboratoryー」

は“里山づくりに取り組む中で多くのことを学ぶことができる里の実験場”である。日ごろ自然や里から離れ暮らす「素人」の県民一人ひとりが試行錯誤の中で里山のくらしを体得し、知恵を学べる場所となっている。

開始から8年目を迎え、現在は田・畑・果樹園・花壇・森などで農業や森林分野等の専門アドバイザーの助言を得ながら里山のくらしを実践し、学びと交流の輪を公園利用者（県民）へと拡げている。

「現代の里山の創造」を目指す開拓団の活動が従来の地縁型コミュニティとは異なる非日常コミュニティを育てており、公園が理念に共鳴する人が集う「共感型コミュニティ」の受け皿となる可能性を感じている。2015年に本公園で「都市緑化あいちフェア」が開催される。2年後には更に開拓が進んだ里の姿が示せるよう、協働者が心を合わせて取り組んでいきたい。



餅つき 栽培作物を調理する「食育」を重視しプログラムに取り入れている



会員制プログラム 「お米と野菜作り隊」など複数を実施



畑の作物栽培 野菜は調理の他、体験学習等に活用



森の手入 植生調査、森づくり計画を立てて活動



雪の朝 手製の芝ソリはいつも大人気、雪の日はグレンデ誕生



世話役会 協働関係者が平日夜に集まり調整（ラボハウス）